

認知症モデルハウス Model Woonwijk

～ 認知症モデルハウスの取り組みについて ～

報告者:北川 剛司

1. 概要

- ユトレヒト市が設置した認知症モデルハウスは、北欧から発祥したもので、介護の技術を更に発展させるために設置された施設である。高齢者をより長く社会のメンバーとして活動できるよう、高齢者本人、その家族、知人、友人が結束して機能することに重点を置いている。今回は、このモデルハウスの概要について説明を受け、施設を視察した。

2. 説明者

Mr. Willem Bastein



Mr. Willem Bastein

3. 主な説明内容

この認知症モデルハウスは、オランダの建築情報センターの位置付けとして2004年に設

置された。新しい技術を求めて活動するのではなく、住宅の情報発信施設となっている。情報発信施設になった経緯は、住宅事業者に「認知症発症者、障がい者などに対する住宅に必要なものは何か？」との質問を行ってきたが、明確な回答がない状態であったため、建築に関する情報を収集するようになり、このような施設形態になったのである。今では、情報提供することで、オランダの住宅事業者がセンターから情報収集し、住みやすい快適な住宅を建設、提供しているのが現状である。



車椅子等でも使いやすいキッチン

このモデルハウス施設では、住宅業者向け、学生向けなど対象が異なるコースが開催され、住宅のあり方について学んでいる。また、この施設のモデルハウスには、5つのモデル「①認知症発症者、②障がい者、③目が見えない者、④より快適な環境、⑤リフォームのあり方」などのモデル住宅が設けられ、情報発信・提供がされている。

認知症を発症された人の住宅を考える上で、オランダの住宅文化事情を学ぶ必要がある。そこで、オランダの住宅文化事情に関して、簡単に説明する。

オランダは、1945年の第二次世界大戦において、ほとんどの住宅が壊された。そこで終戦後、多くの住宅が建設されるようになった。住宅の建設中に天然ガスが発見され発掘が行われるようになり、オランダの経済状況が好転した。これを契機に、他国に働きに出ている多くの国民が帰国し、さらに多くの住宅が必要となった。

オランダの平均的な住宅は、49平米が普通である。そのため、このモデルハウスも平均的な大きさのモデルにしている。

認知症を発症した人の住宅のあり方は、「認知症発症者が今までのライフスタイルを継続して普通に暮らすこと」であり、そのことが効果的な治療につながっている。そのことを



モデルハウス内で説明聴取の様子

基本を考え、情報提供している。住宅には、新しい技術をなるべく取り入れず、その人が暮らしてきた生活習慣を尊重することを重んじている。

認知症を発症された人は、施設に入らなければならないレベルになるまでの約2年間を普通に暮らすことが認知症対策でも重要な課題である。そこで、自分自身で如何に普通に過ごすか、ま

た快適に過ごすことのできる住宅のあり方が重要なのである。認知症の症状は、十人十色であり、その人に適した住宅環境もその発症者によって異なる。そのために、このような情報提供センターが重要なのである。認知症発症者の住宅の考え方は、安全性を確保し、今までの生活習慣を尊重した設備になっているかが求められる。

健常者との住宅の差は、ICT を利用し、認知症発症者をモニタリングしていることだけで、その他は、ほぼ同じ環境だと言える。

4. 主な質疑

○ 今回モデルハウスを視察したが、認知症の発症者に関して、施設に入るまでの生活で最終的にモニタリング、もしくは行動を見守るしか対応方法はないのか？

→ 認知症に関する認識は、「認知症は治らない」ということである。認知症に関して、世界的に治療薬の開発に相当な資金が使われ開発がされている。しかし、認知症を発症された人が、如何に最後まで



気持ちよく過ごせるかに関しては、支援や資金がほとんど使われていないのが現状である。

現在のオランダでは、認知症発症者の約 80%の人が自宅で暮らし続けている。また、その人たちは、自分自身の 80%能力を使って生活しているが、残りの 20%のことはできない。できる 80%のことを最大に生かし生活することが重要なのだ。

自宅で生活する上でいろんな住宅設備が考えられる。例えば、自動的にランプが点灯するなどの設備は、認知症の人のことを考えて開発されていない。また、自動車会社などであっても、生活を楽に過ごせることを考えて開発されているが、長期的、短期的に記憶を失った人のことを考えて開発はされていないのが現状である。

自分自身の力で過ごすと言うことは、例えば、自動車の運転と同じである。認知症発症



者が、初期の段階であっても今までの経験があつてこそ、運転できるのであつて、他国、また知らない土地、ルールが異なる地であれば、認知症の発症者のみならず健常者の人でも運転は困難である。この長期的、短期的に記憶を失った人のことを考えると、これまで続けて生活してきたことを続けられることが非常に大事である。建築家か

ら考えると自動的に電気が消え、蛇口に関しても、また、コンロに関しても、新しいことはいくらでも考えられる。しかし、認知症発症者に関しては、長年生活してきた仕様が重要である。全く新しい設備だと生活できなくなる。そこで安全を考えてできることは、コンロであれば自動的に火が消え、ガスが止まるなど、安全面を考慮し普段の生活を続けることが必要だと言うこと。

次に重要なことは、症状が重くなると、徘徊が考えられる。認知症発症者は、逃げ出したいと言う思いで徘徊するのではない。認知症発症者は、「外に出たい、緑のあるところに行きたい」という思いで出かけるのである。そこで、このような徘徊に関して重要なのは、ルートを決め行動するなどの対応が必要になる。また、GPSなどを使って、見守ると言うことも重要になってくる。認知症発症者に、外に出ても大丈夫だと認識してもらって、安心してもらうことも大事だ。そして、外に出ることも症状の治療に対しても大事なことである。また、認知症発症者には、長年住み慣れた土地で、生活するのも大事なことである。

5. 所 感

認知症発症者に対する支援のあり方が、日本と大きく異なると思われる。日本では、最新技術を駆使し、快適な環境を求める傾向があるが、オランダでは、今までの生活習慣を重視し、施設に入らなければならないレベルまで如何に自宅で快適に過ごすかが求められている。例えば、今までガスコンロを使っているのなら、安全性を考えIHに変えず、今までの生活習慣を基本的にガスコンロで生活するようにするなどだ。



今回同じオランダでの視察を行ったアンダンハウスにおいても同じで、如何に自宅で過ごせる期間を大事にするのかが、認知症発症者に対する支援の根本的な考え方である。

また、オランダの認知症発症者支援は、ボランティアが中心になって、認知症発症者のみならず、障がい者に対しても支援している点でも日本と異なる。今回視察したオランダのユトレヒト市では、市民の40%近くがボランティア活動を行っていると言われている。そのようなことができるのは、オランダの良好な財政状況によるものであるが、オランダと日本の経済状況、文化意識が異なっても、認知症発症者に対する支援が上手く行われているのであれば、それを参考にして政策を考え、少しずつ試みながら導入していけば良いのではないか。

特に、認知症発症者に対する基本的スタンスは、府での政策形成に非常に参考になる。私としては、薬による治療も重要だと思うが、政策を考える上で、オランダのように地域医療、家族、社会で支えるケアによる対応を重視する政策、意識改革が必要であると思われる。



モデルハウス内での質疑応答の様子

最後にこの視察を通じて、日本の住宅設備は世界に誇れる物だと実感した。例えば、モデルハウスの説明で、ウォッシュレットを自慢されていたが日本では当たり前にも備え付けられている。日本で生活していると当たり前のことが、外国では最新設備であることが往々にしてある。そこで、日本の住宅設備を俯瞰し、認知症発症者などの支援で先行している国の基本的なスタンス、考え方を参考にすることで、日本独自の効果的な在宅ケアでの支援ができると思う。

政策を考える上での一つの考え方と捉え、府政として何が必要なのか考えなければならない。これからの政策の考え方は、認知症レベルが進んでも、普通の日常生活が過ごせることを基本にする必要があると思われる。